

労働経済II

第5回

失業(1)

失業の基本

失業の定義

次の3つの条件を満たしている人を、失業者とよぶ。

- 仕事についていない
- すぐ仕事に就くことができる
- 仕事を探している（いた）

失業の何が問題か

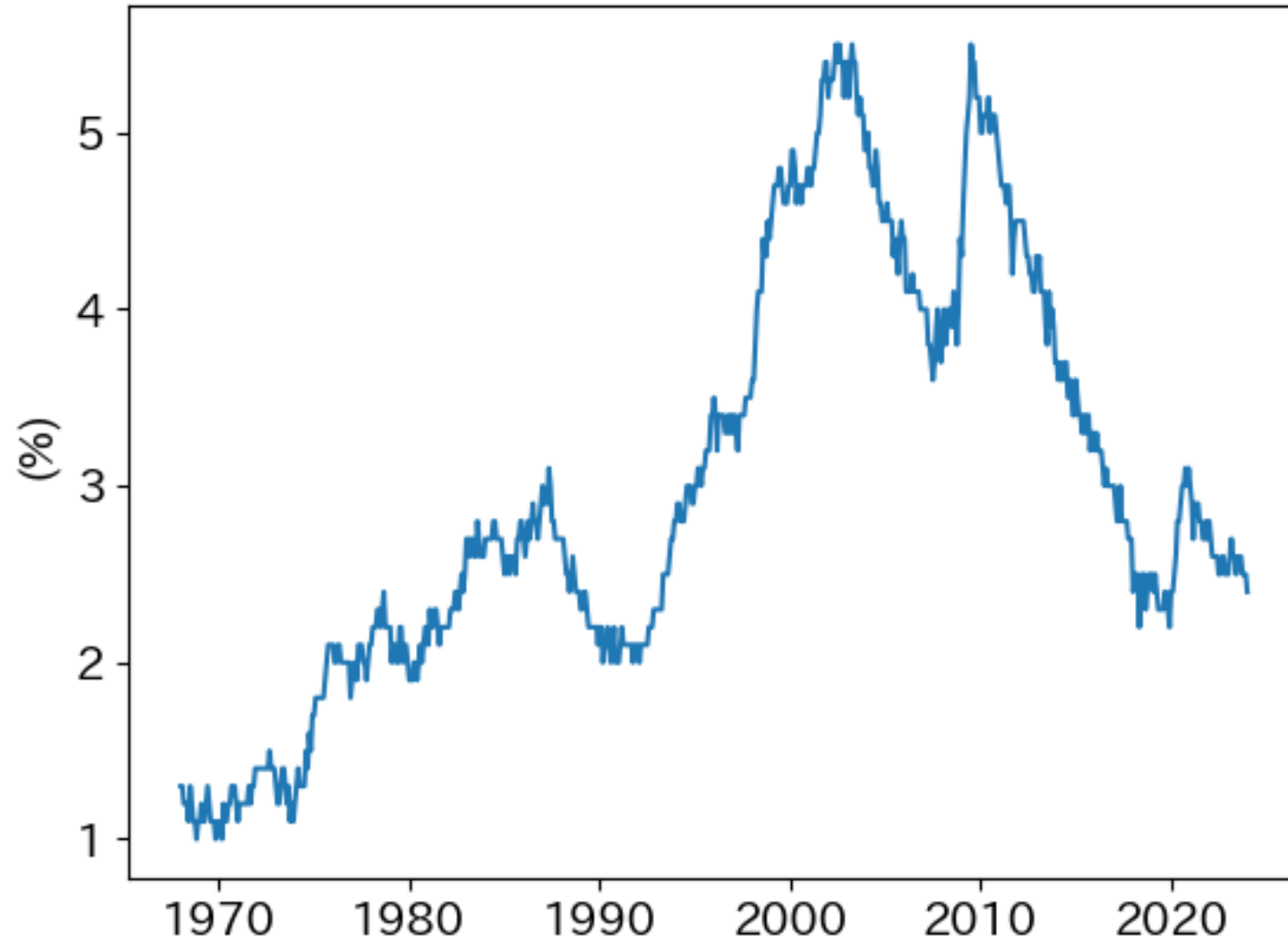
ミクロレベルで

- 雇用がないと、収入がない。
- 自力で生活ができなくなる可能性。

マクロレベルで

- 活用しきれていない生産要素の存在。

失業率



失業の分類

様々な失業

失業はさまざまな分類がされている。

- 自発的失業
- 非自発的失業

- 自然失業
- 循環的失業

- 需要不足失業
- 摩擦的失業
- 構造的失業

労働者都合か否か

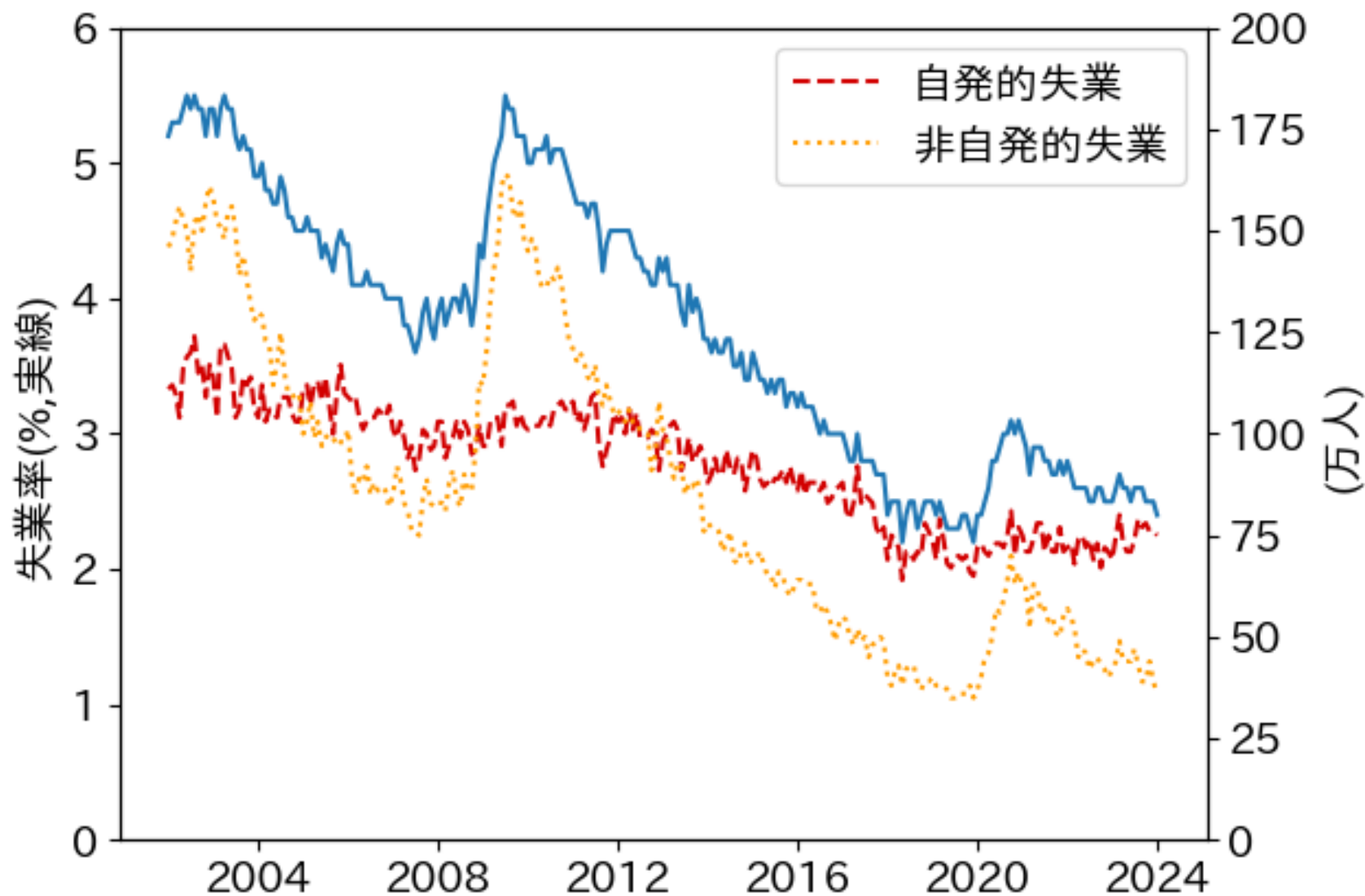
自発的失業

- 労働者の都合で失業したもの。転職のための一時離職など。

非自発的失業

- 労働者の意思に反して失業したもの。リストラなど。

自発的失業と非自発的失業



失業の性質的分類

-



景気の良し悪しと関係なく、経済の活動の中で必然的に発生する失業

-

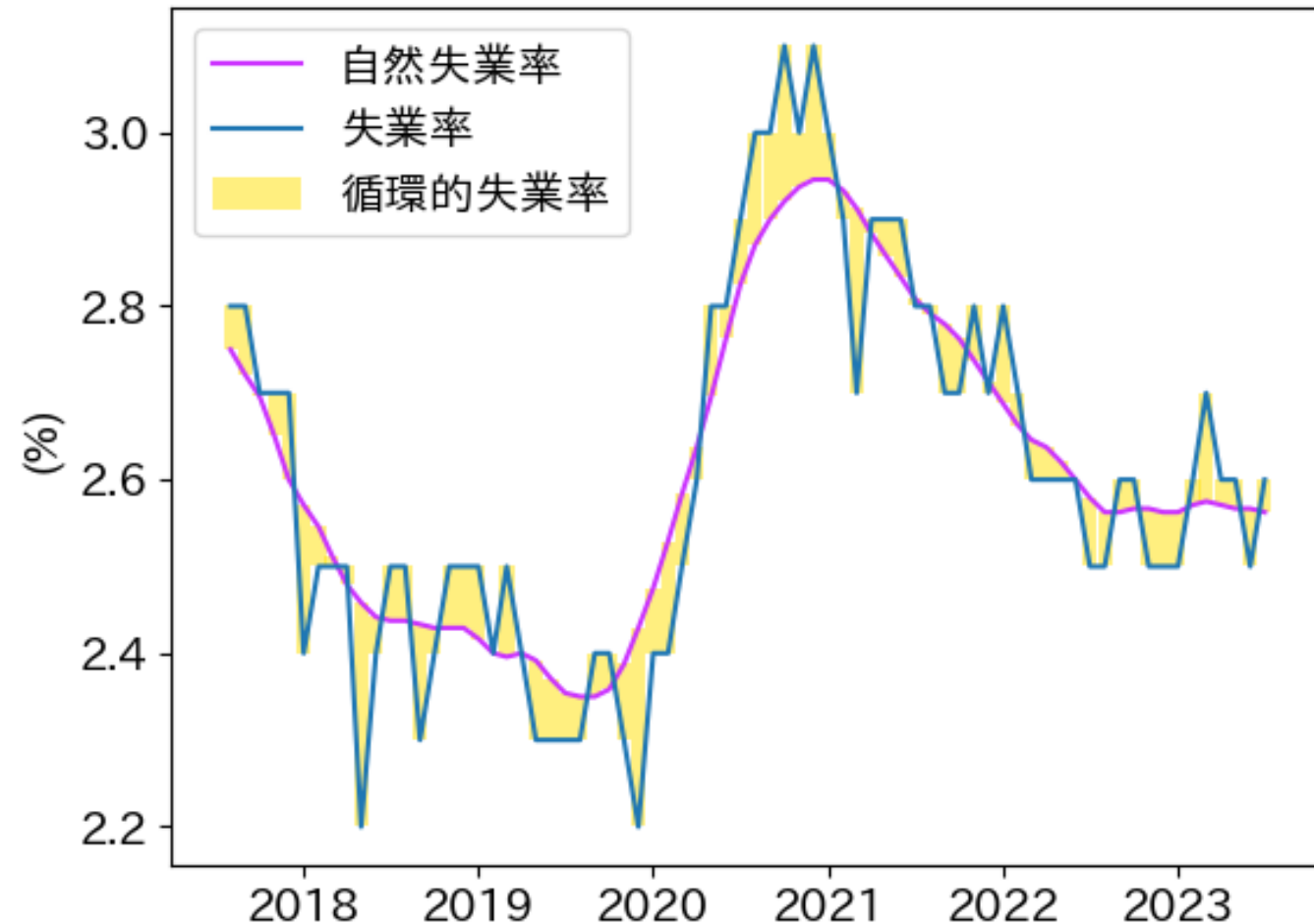


景気の変動によって発生する失業

データで見る自然失業と循環的失業

現実にとれほど自然失業が存在しているかを確認するのは、かなり困難。

- よく見るのは、移動平均を取る方法。
- もとの失業率と自然失業率の差が循環的失業率。



自然失業率の決定モデル

自然失業の発生プロセスを、簡単な数理モデルで理解しよう。

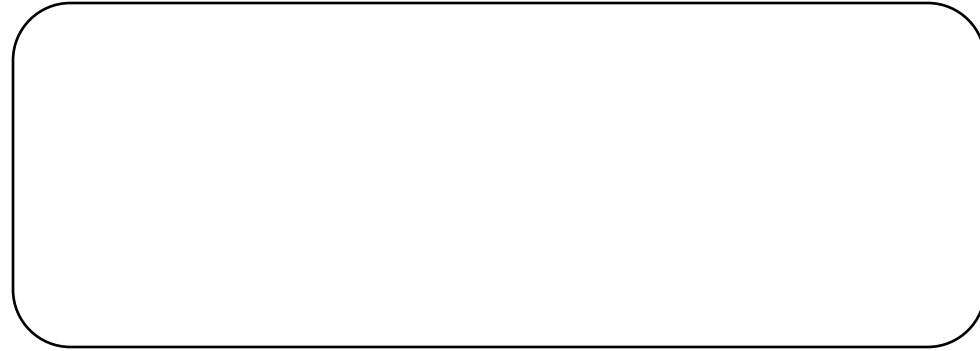
定義から、次の恒等式が作れる。

$$\underline{L} = \underline{E} + \underline{U}$$

$$\underline{\text{労働力人口}} = \underline{\text{就業者数}} + \underline{\text{失業者数}}$$

失業率、就職率、離職率

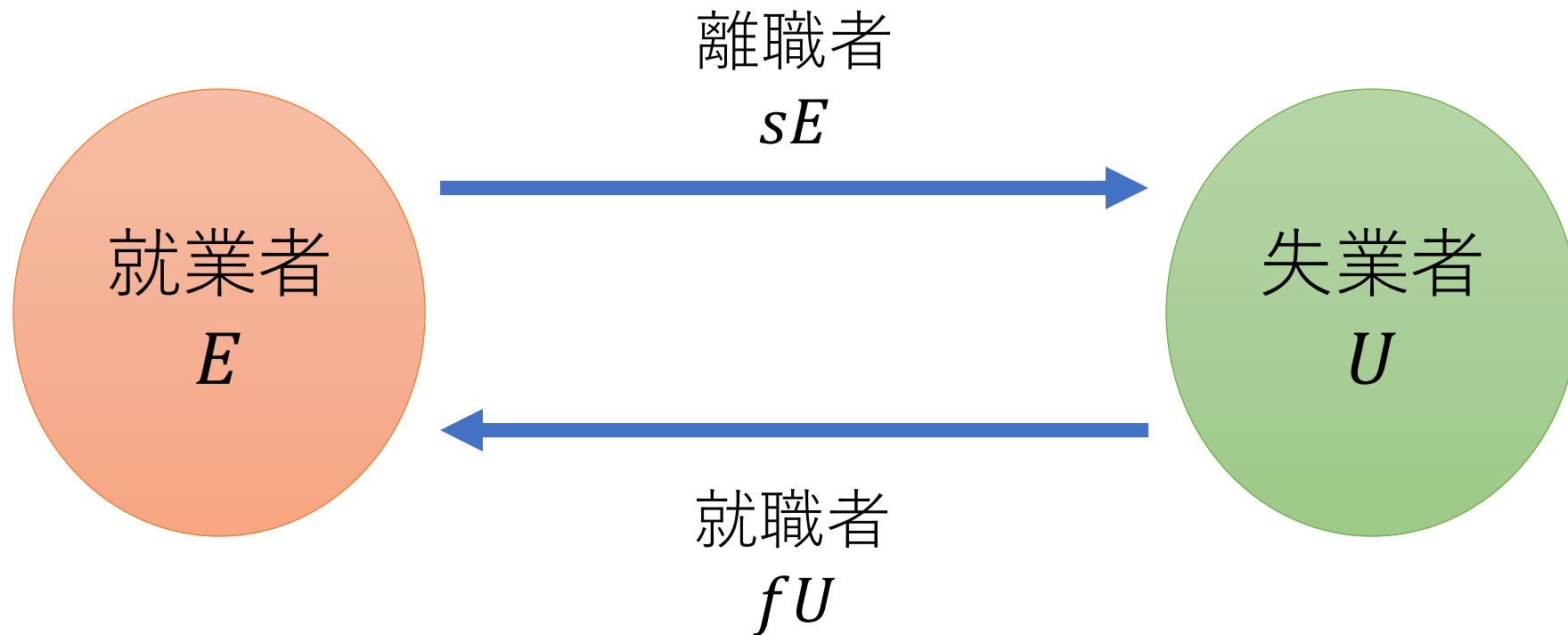
失業率 u は、次のように計算される。



就職率(f)：失業者が職を見つける確率

離職率(s)：就業者が離職する確率

労働市場フロー



自然失業率の算出

自然失業率は長期的な失業率。

労働力人口が一定で、長期的に失業者数が一定となるとき（定常状態のとき）は、



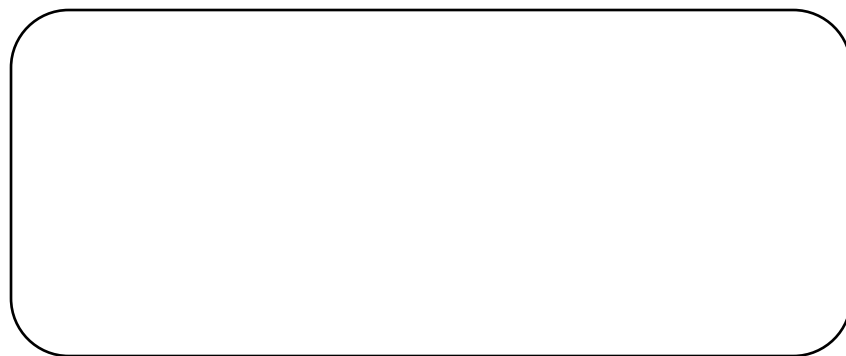
$$\text{就職者数} = \text{離職者数}$$

このときの失業率が、自然失業率。

問い

1. $fU = sE$ であるとき、失業率を求めよ。

答え：



失業の要因的分類

失業は、要因で

- 需要不足失業
- 構造的失業
- 摩擦的失業

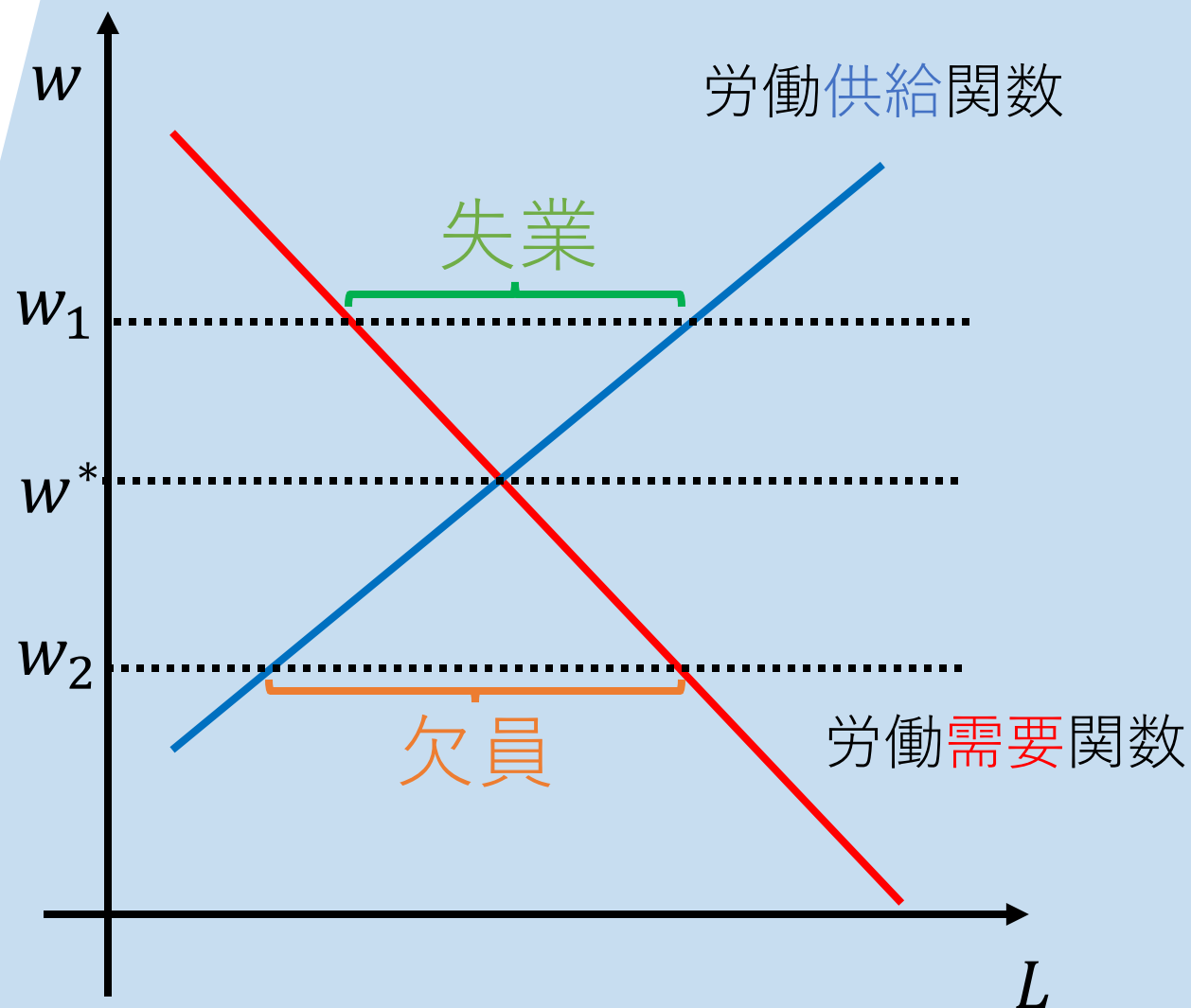
にわけることができる。

需要不足失業

- 需要と供給のミスマッチによって発生する失業
 - 経済の不均衡が原因

労働供給 > 労働需要
失業の発生

労働供給 < 労働需要
欠員の発生



摩擦的失業・構造的失業

- 摩擦的失業

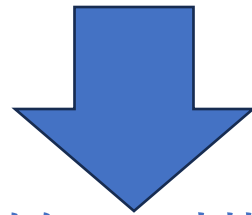
- 職探しに必要とする時間的要因で発生する失業
 - 面接や書類選考、移動など

- 構造的失業

- 労働者の特性と求人企業が要求する特性がマッチしないことによって発生する失業
 - 労働条件や地理的条件、スキルや経験など

ミスマッチ失業

摩擦的失業と構造的失業はデータからの区別が難しい。



二つをまとめて摩擦的・構造的失業とか、ミスマッチ失業とかいうこともある。

- 構造的失業は、ネガティブな要因によって発生していることが多く、摩擦的失業より問題とされることも。

均衡での失業

失業の存在は、労働の超過供給（不均衡）が要因だけではない。

現実には、

自然失業率＝実際の失業率

とみなせるときにも、失業も存在すれば、欠員も存在する。

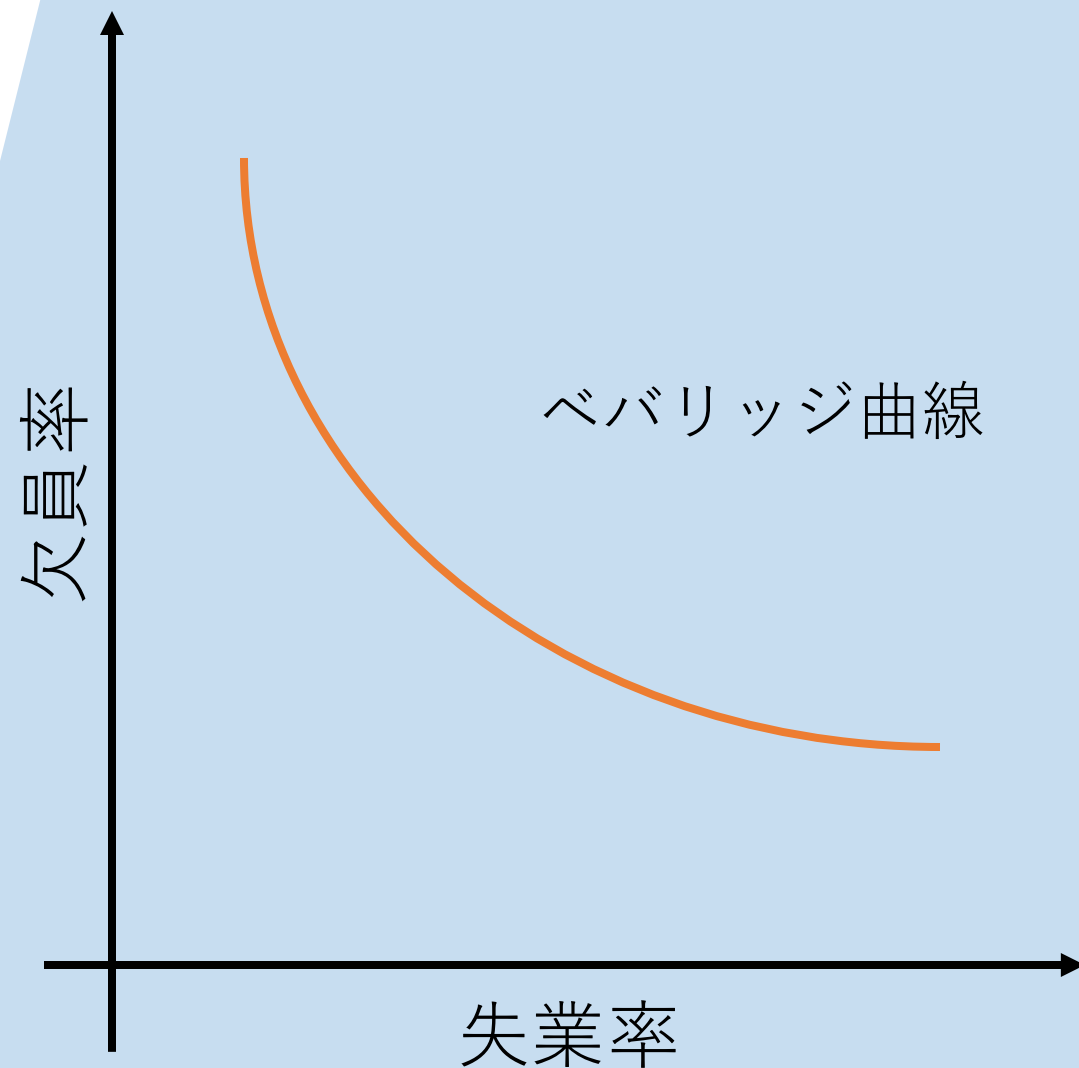
失業と欠員の共存は、ベバリッジ曲線（UV曲線）と呼ばれるもので確認できる。

ベバリッジ曲線

横軸に失業率、縦軸に欠員率をとった時に観測される曲線。

- ほとんどの国で、右下がり
- 失業率と欠員率の負の相関
 - 欠員の増加は求人の増加を意味するので、失業率は減る。

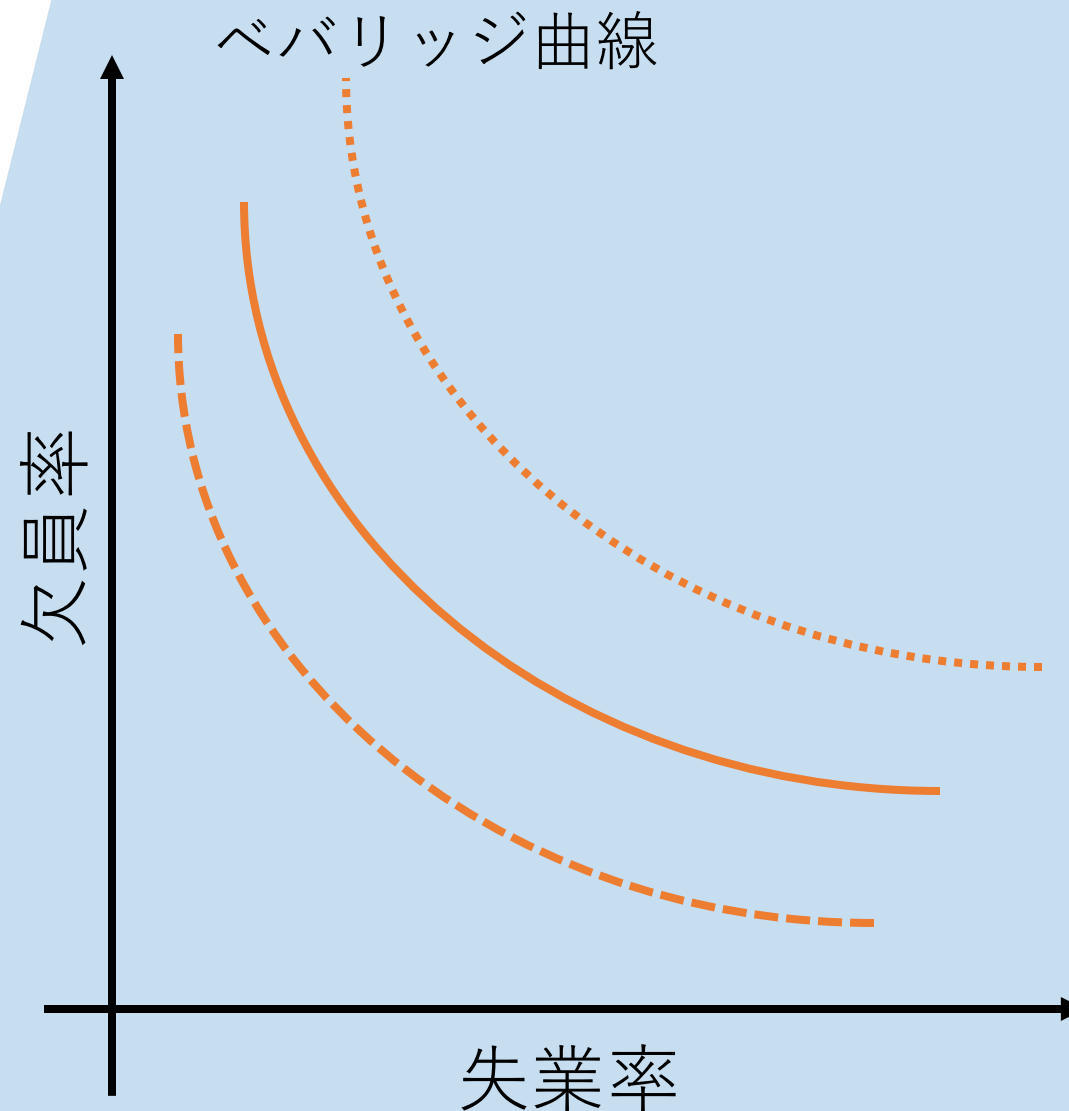
景気循環に従って曲線上を変動する



ベバリッジ曲線のシフト

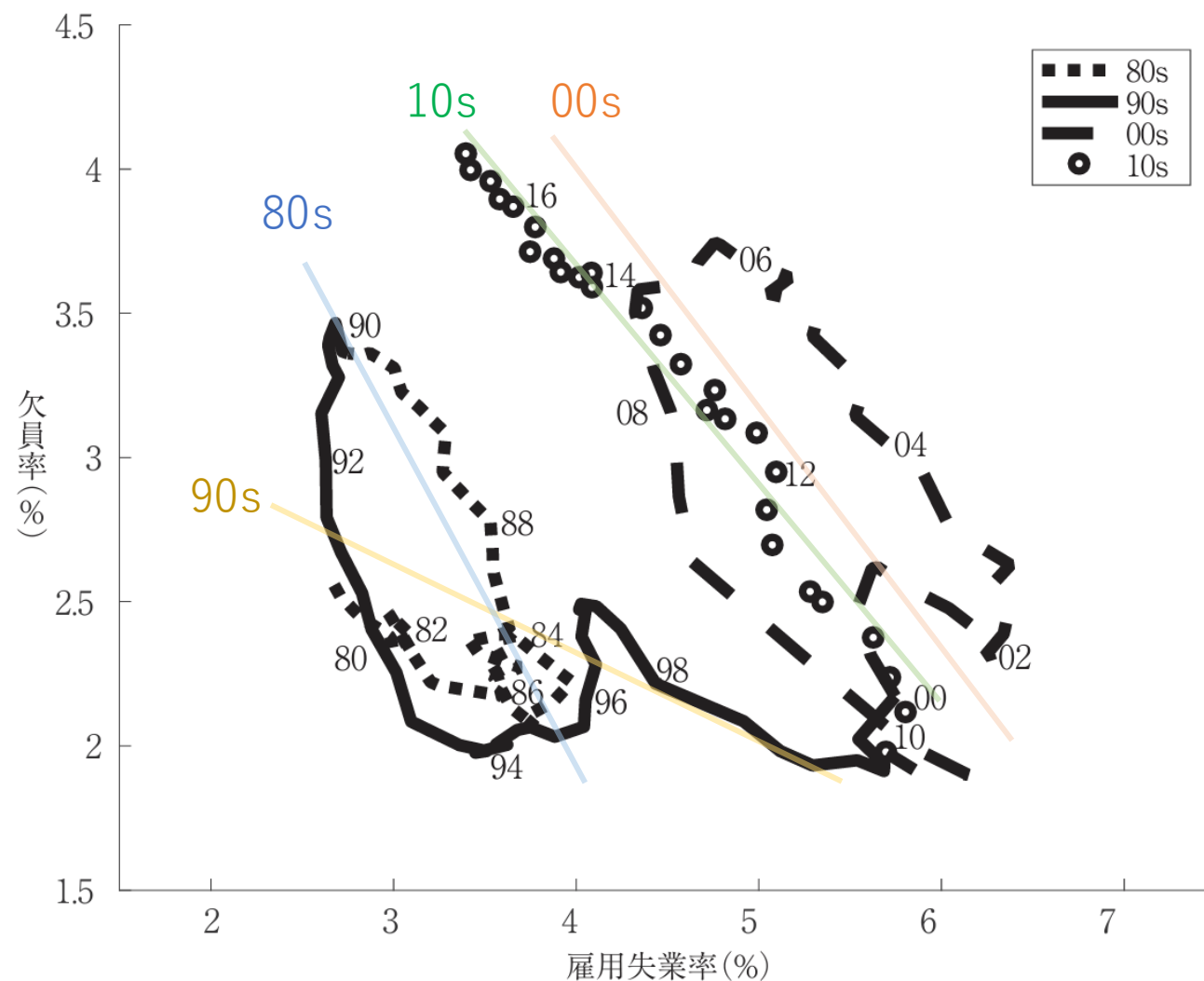
ベバリッジ曲線は、雇用政策などでシフトする。

- ミスマッチ失業が減少する場合は**左シフト**
 - 公共職業安定所(ハローワーク)の拡充や公共職業訓練の実施など
- ミスマッチ失業が増加する場合は**右シフト**
 - 失業給付の拡充など



日本のベバレッジ曲線

- 各年代において右下がりの関係が見てとれる。
- 90年代にフラット化したが、その後また傾きが急になっている。



ベバリッジ曲線による分解

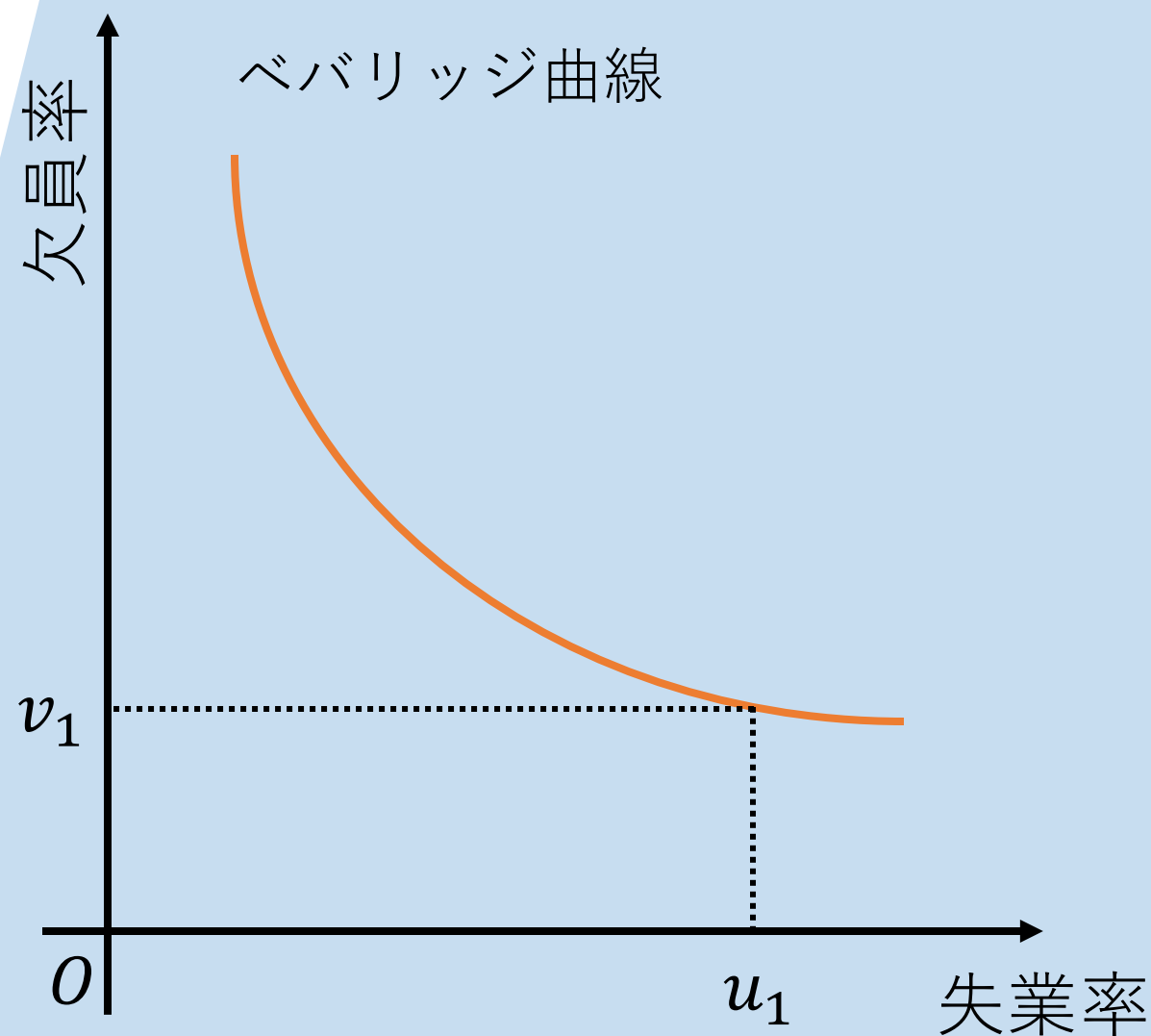
ベバリッジ曲線を用いて、失業を

1. 自然失業(ミスマッチ失業)

2. 循環的失業

に分解することができる
(とされている)

いま、欠員率、失業率が
 (v, u_1) であるとする。



ミスマッチ&需要不足

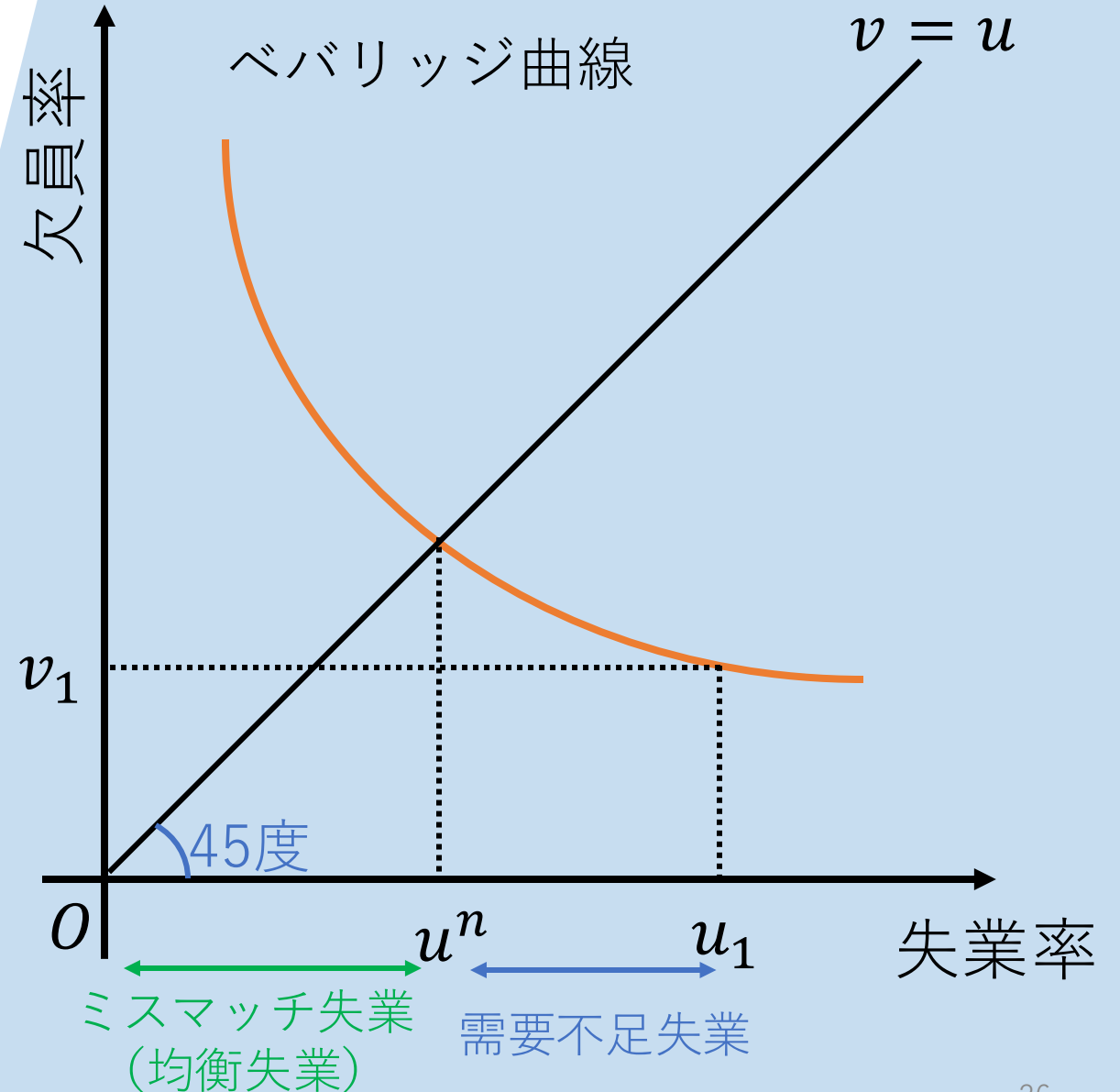


のときに達成される失業率をミスマッチ失業として考える（均衡失業とも呼ぶ）。

- 図では、 u^n がミスマッチ失業率。

実際の失業率とミスマッチ失業との差を、需要不足失業と呼ぶ。

- 図では $u_1 - u^n$

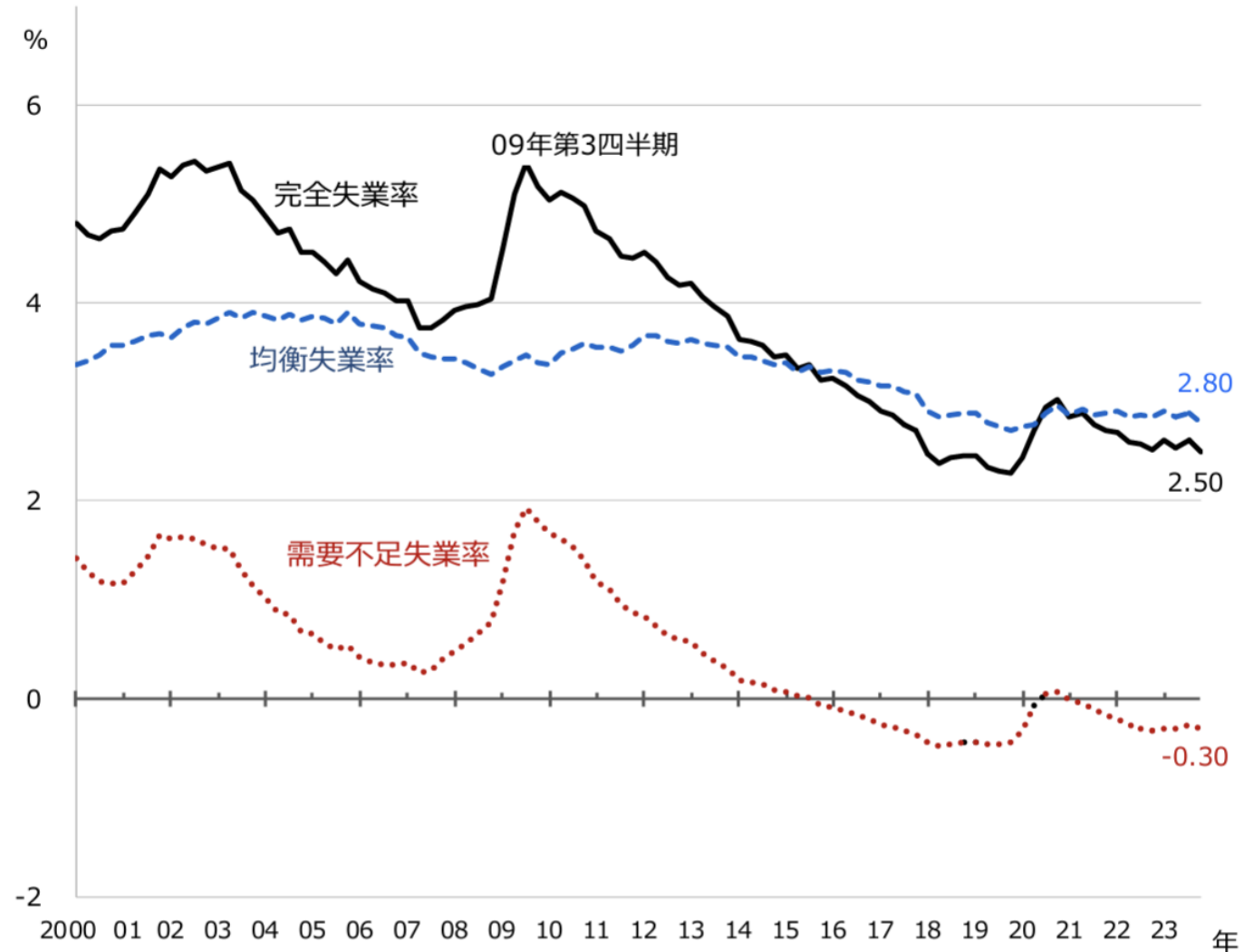


要因分解のデータ

労働政策研究・研修機構などが、実際の失業率データから要因分解を行なっている。

右図は「ユースフル労働統計2022」に掲載されている。

このようなベバリッジ曲線を用いた一連の分析をUV分析という。



UV分析の補足

- ミスマッチ失業と需要要因の失業は、本来不可分であることを注意。
- ベバリッジ曲線が導かれる理論のひとつとして、サーチ・マッチングモデルが挙げられる。
 - ただし、基本的なモデルでもそこそこ難しい。
 - さらに、現実とフィットするようにモデルを拡張しているものはさらに難しい。
 - 本講義では扱わないが、興味のある人は、宮本(2017)を参照すること。

景気循環と失業

景気循環との関連が強い。

失業率と関連する指標としてメジャーなものが、
インフレ率。

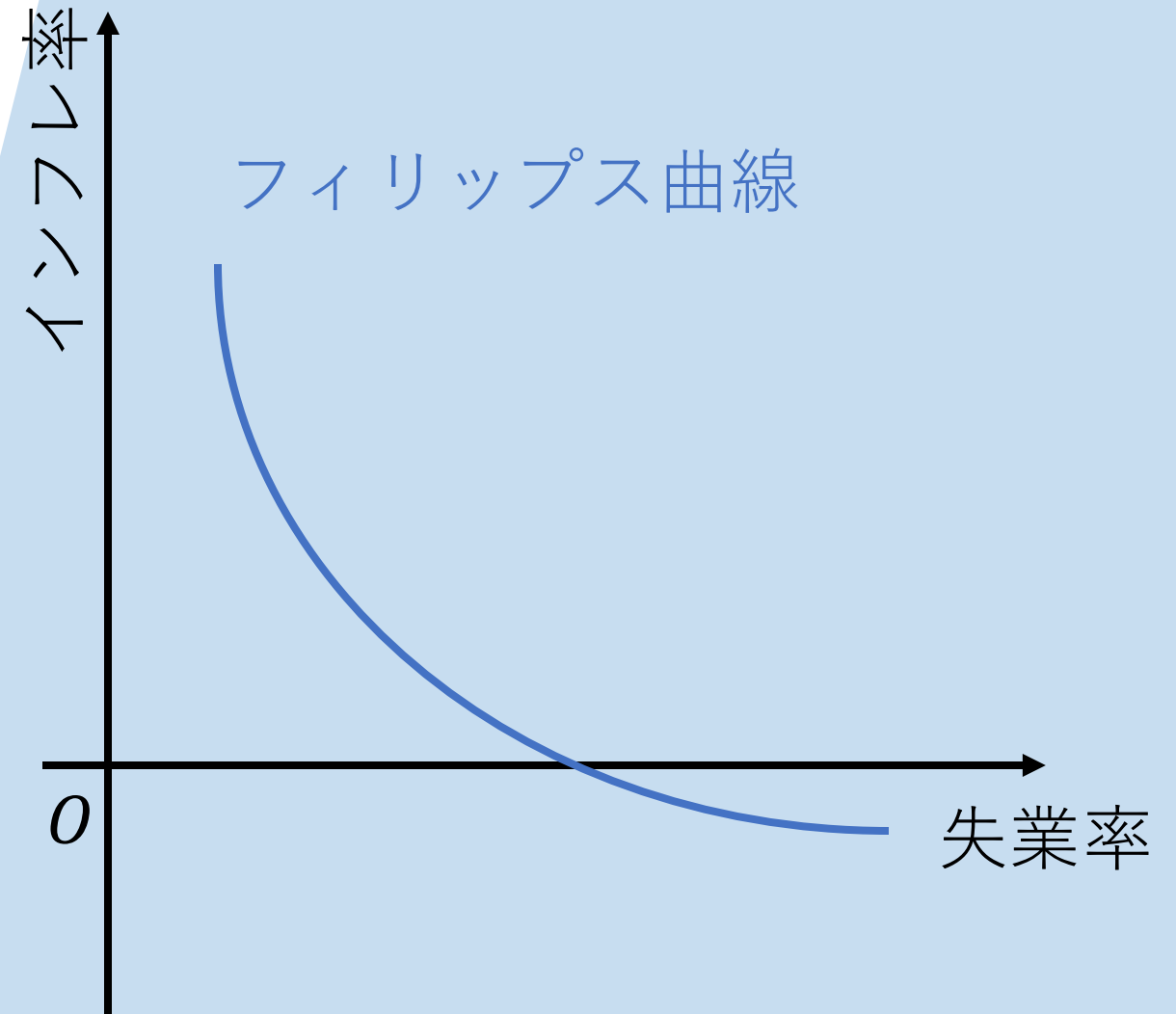
インフレ率：物価の上昇率

フィリップス曲線

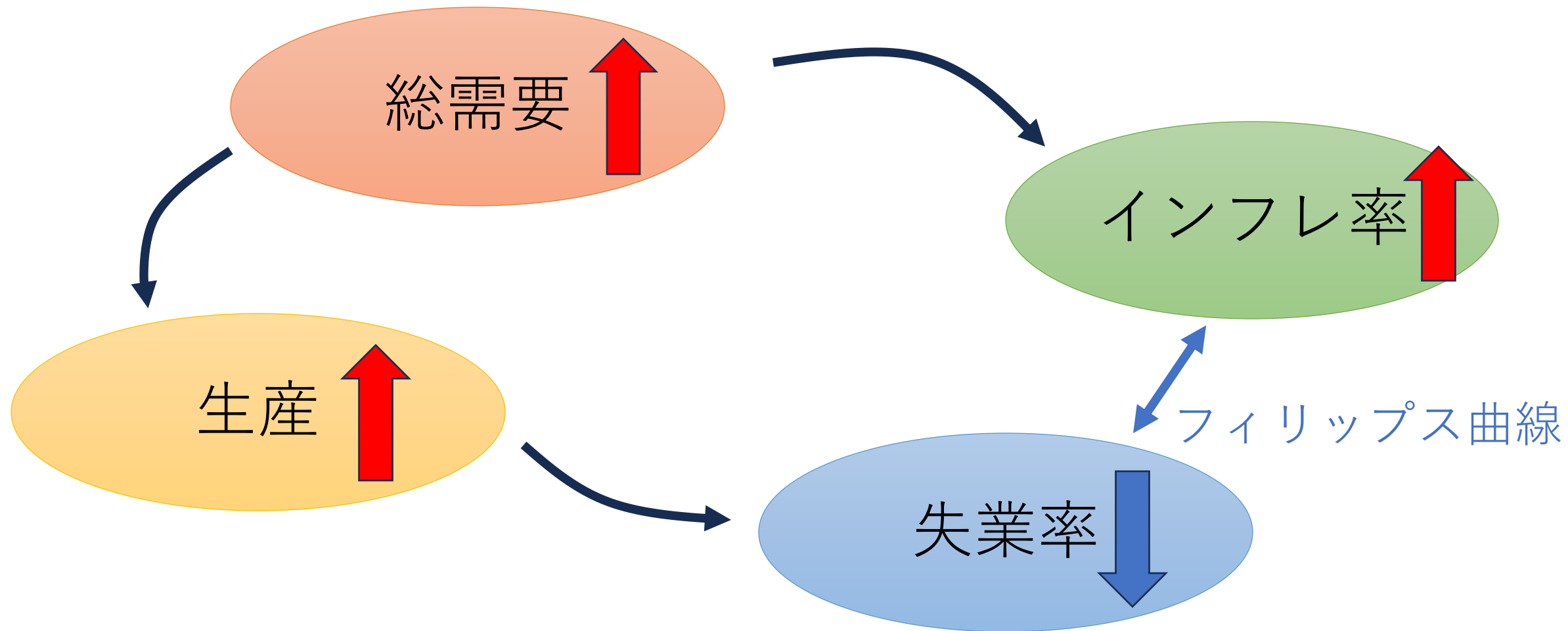
短期的には、失業率とインフレ率の間に負の相関がある。

この負の関係を示す曲線をフィリップス曲線と呼ぶ。

インフレ率と失業率の間には短期的にトレードオフが存在することを意味している。



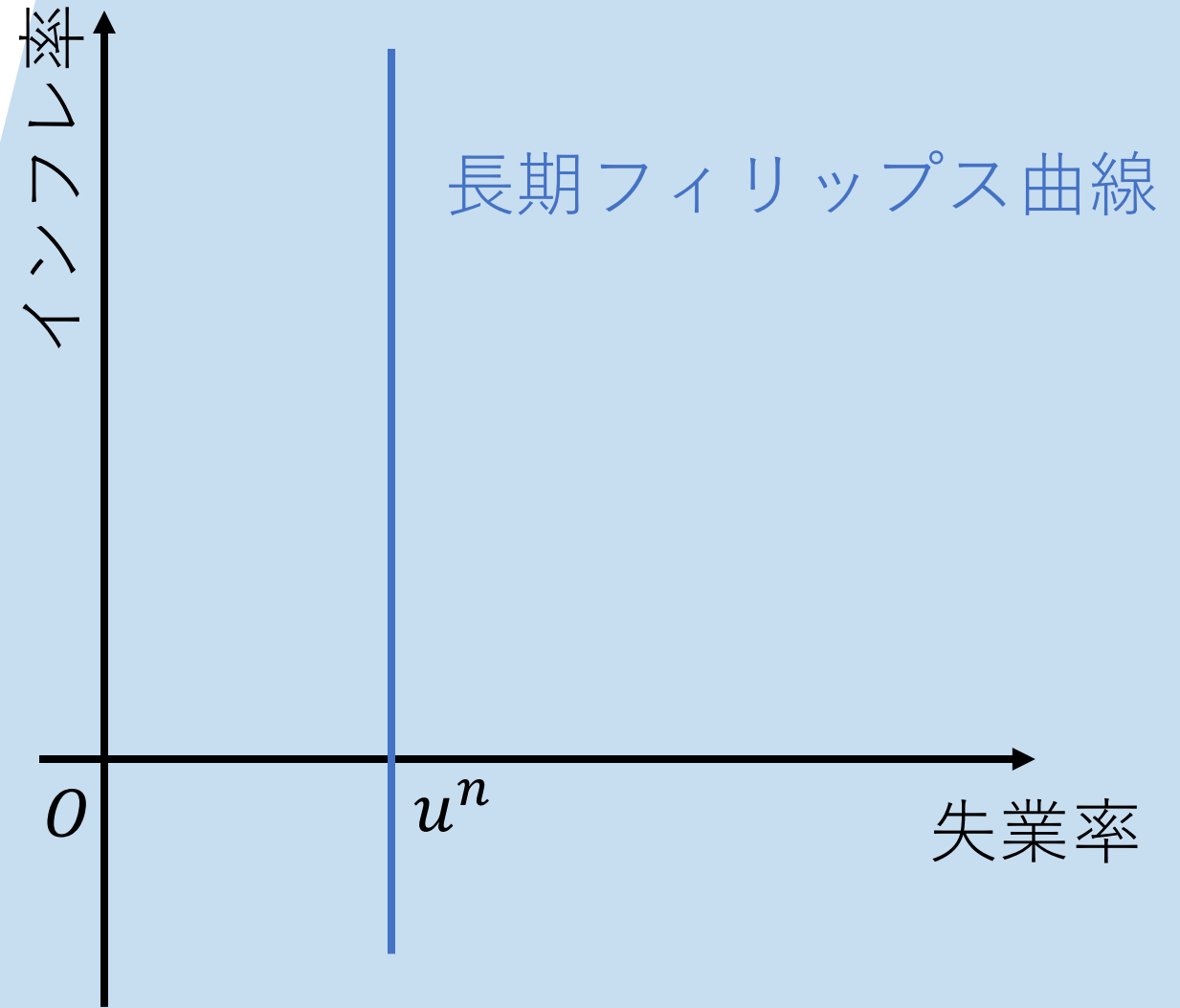
フィリップス曲線はなぜ右下がり？



長期フィリップス曲線

長期的には貨幣の中立性が成立しているとすれば、長期のフィリップス曲線はインフレ率と関係しなくなる。このとき、長期フィリップス曲線は自然失業率の水準で垂直となる。

貨幣の中立性：貨幣量は実物経済に影響を与えないという考え方。



フィリップス曲線の経験的定式化

天下りの式的ではあるが、フィリップス曲線は、次のように与えられると考えられている。

$$\text{インフレ率} = \text{期待インフレ率} + \beta(\text{失業率} - \text{自然失業率})$$

人々が予測する将来のインフレ率

つまり、現在のインフレ率は：

- 将来の期待されるインフレ率が高ければ、高くなる。
- 失業率が自然失業率を上回れば、高くなる。

短期・長期での期待インフレ率の違い

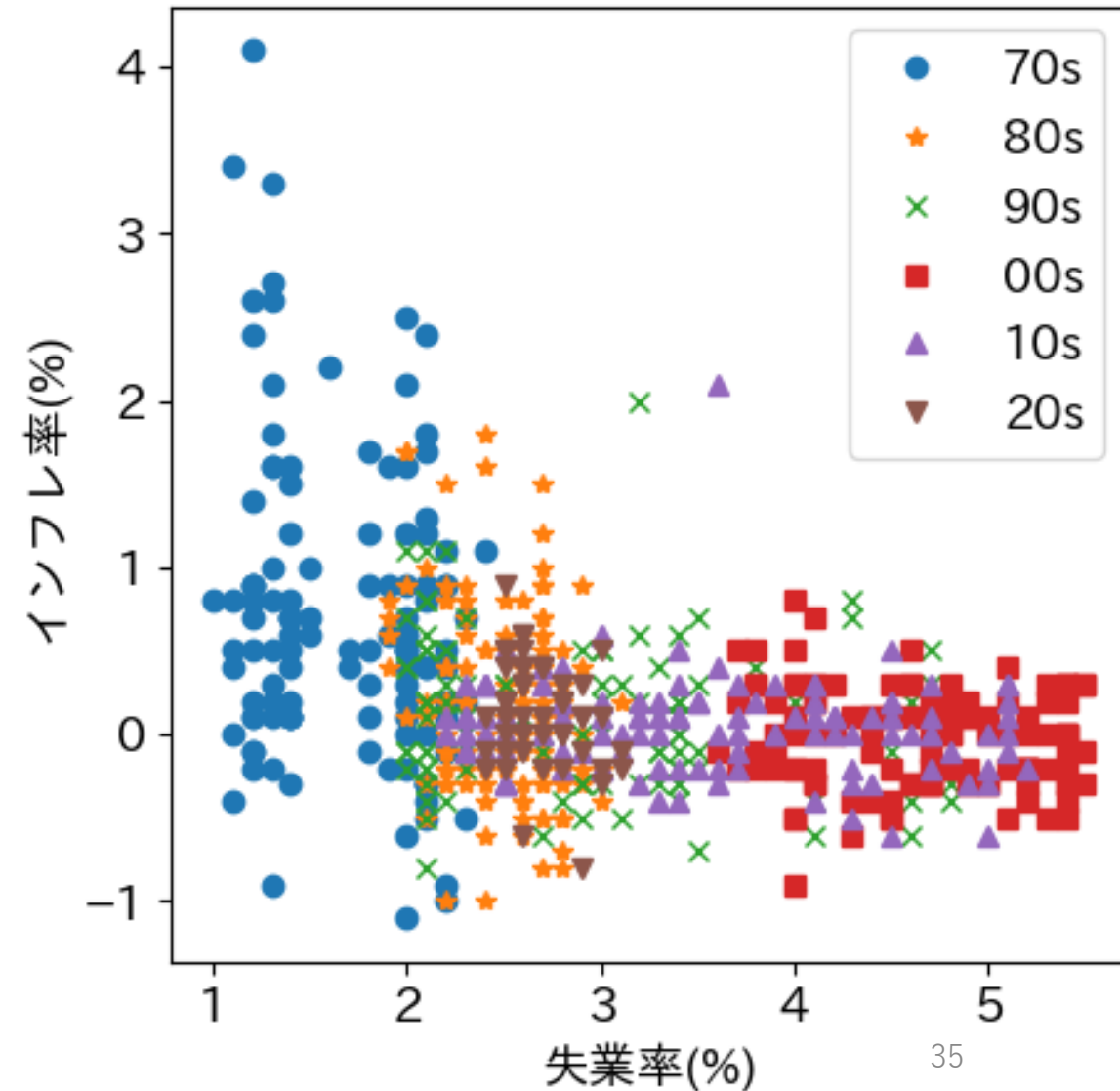
インフレ率

$$= \text{期待インフレ率} + \beta(\text{失業率} - \text{自然失業率})$$

- 短期では、期待インフレ率は固定されており、インフレ率は失業率と反応する。
- 長期(≡定常状態)では、期待インフレ率が実際のインフレ率と同じになるため、失業率と自然失業率が常に等しくなる。

日本のフィリップス曲線

- 年々シフトしてきていることがみて取れる。
- 高度経済成長期の高インフレ、低失業率の時期がある。
- 一方、2000年台不況の高い失業率と低いインフレ率も見て取れる。



インフレとGDP

インフレ率の上昇が喚起される時、

1. 生産が上昇することによって
2. 労働需要が生まれ
3. 失業が減少する。

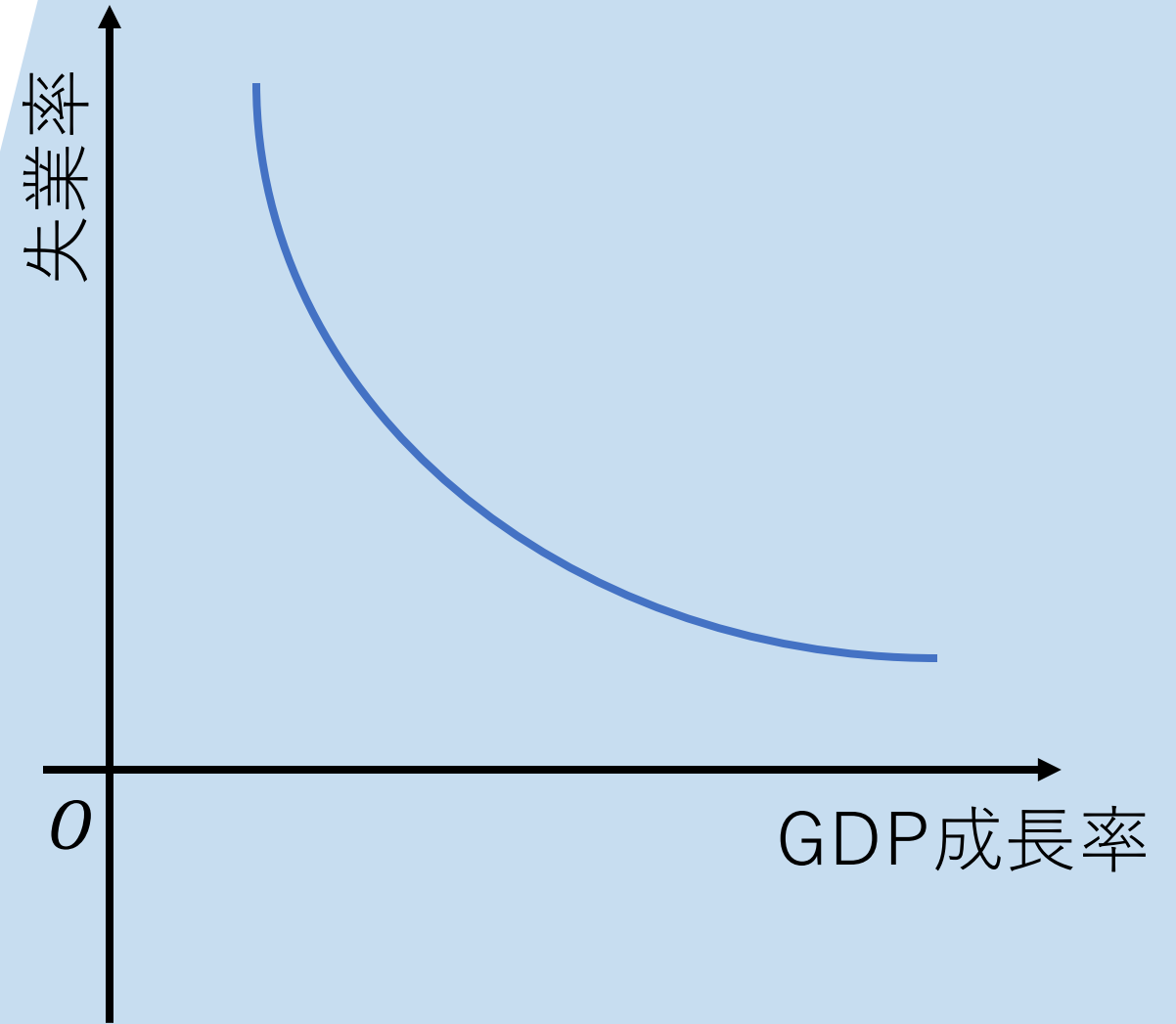
つまり、インフレ率の上昇は生産の上昇と相関を持つことが予測される。

オークンの法則

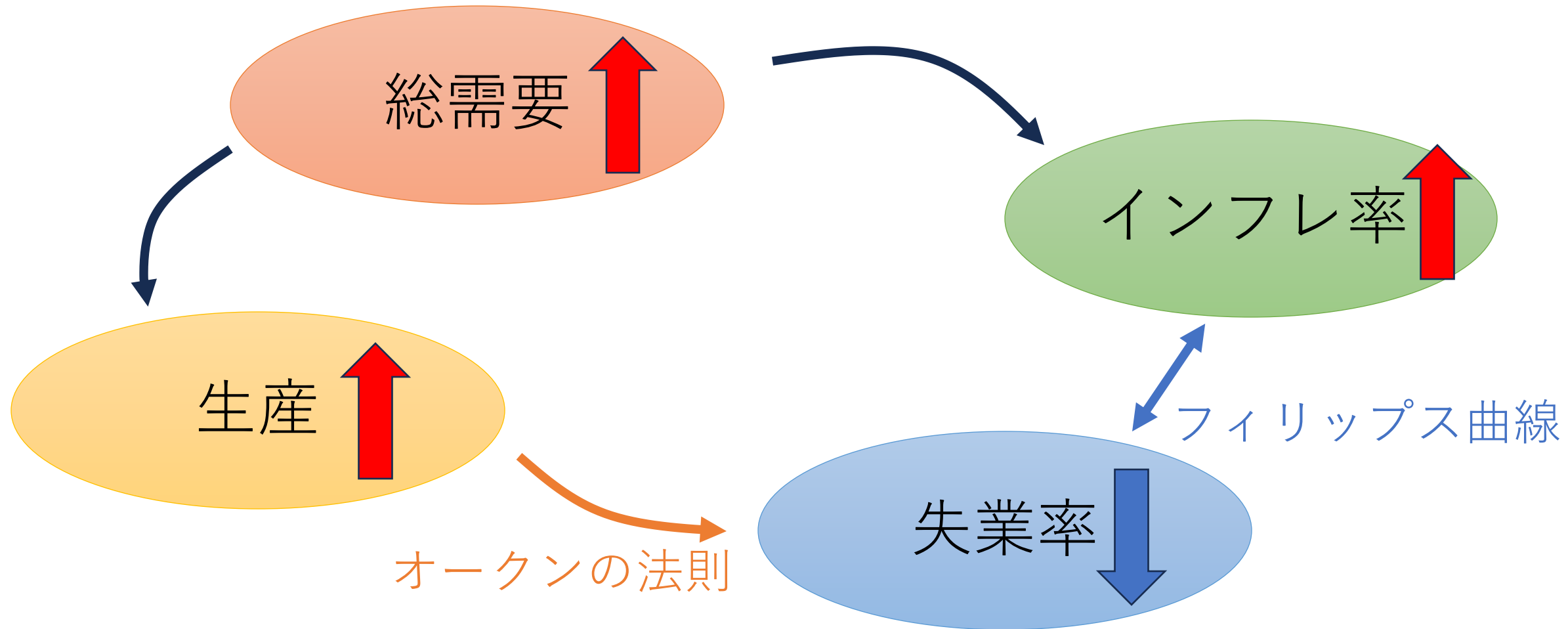
失業率とGDP成長率の間には、しばしば負の相関が見て取れる。

この相関を、

と呼ぶ。



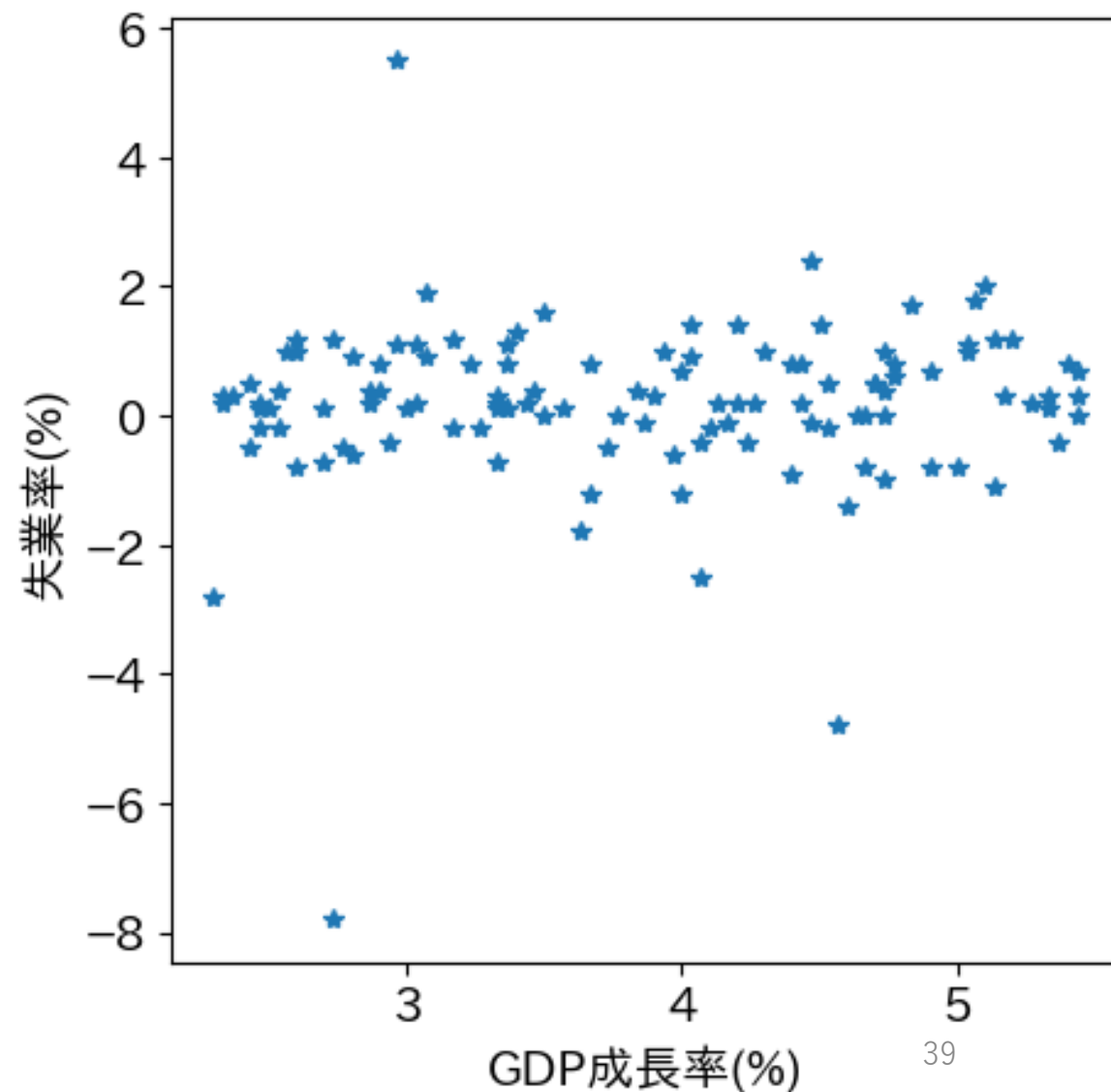
オークンの法則のパス



日本で見えるオークンの法則

日本のデータ(1994年2Q-2023年4Q)を見ると、近年においてオークンの法則が本当に成立しているかは議論がある。

データ出所：総務省統計局「消費者物価指数」&「労働力調査」



GDP成長率と失業成長率

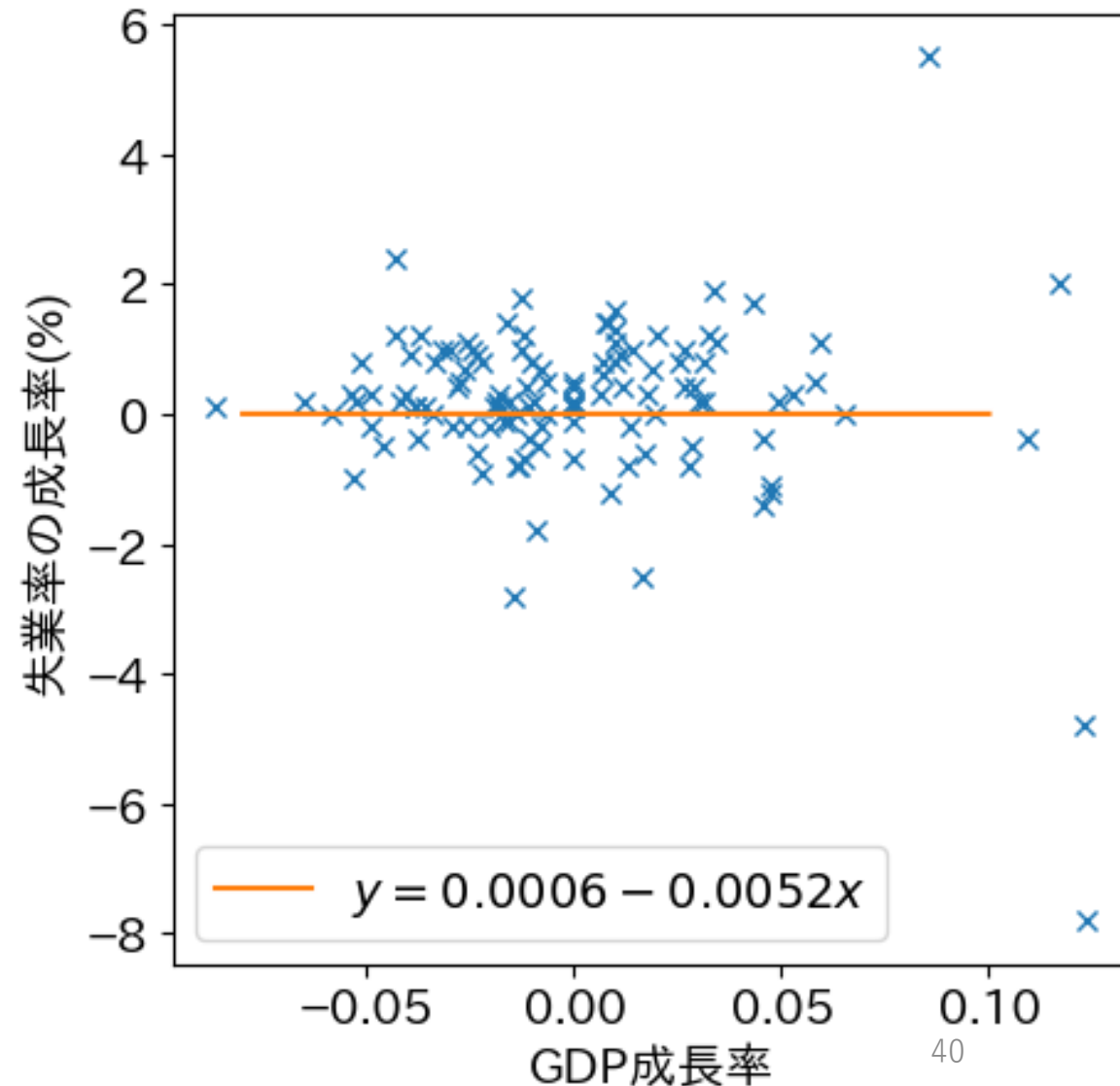
生産規模が1%縮小
(GDPが1%減少)



失業率は1%より小さい減少。

労働保存：企業は労働者を余裕を持った数雇って、完全に利用していない。

- 不況時には生産を抑えるが、労働者はクビにしない。
- **インテンシブマージン**による調整。



まとめ

- 仕事についておらず、すぐ仕事に就くことができ、仕事を探している（いた）人を失業者と呼ぶ。
- 失業はいくつもの分類が存在している。
 - 自発的失業と非自発的失業
 - 自然失業と循環的失業
 - 摩擦的失業、構造的失業および需要不足失業
- 失業と欠員の関係を示すのは、ベバリッジ曲線。
- 失業とインフレ率の関係を示すのは、フィリップス曲線。
- 失業とGDP成長率の関係を示すのは、オークンの法則。

問い

1. 離職率を s 、就職率を f とする。このとき、長期均衡の失業率が、 $u = \frac{s}{s+f}$ で求められた。失業率を下げるためには、どのパラメータがどのように変化する必要があるか。解釈とともに答えよ。
2. ミスマッチ失業と需要要因の失業が、本来不可分であることの例を挙げよ。
3. 企業が労働保存を行うことのメリットとデメリットをそれぞれ一つずつ挙げよ。

参考文献

江口允崇, 寺本和弘 (2017) 「UV曲線と賃金版フィリップス曲線
の変動要因：DSGEモデルからの視点」 『日本労働研究雑誌』
No. 683